

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2019. 1



創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものと同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロ二ーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇一九年一月号（通巻七二八号）

■遊覧寄港〈川端要壽「墮ちよーさらば』より〉三好聖三
私と短歌との出会い（197）松井みね 50

◆第一歌集の頃

小野雅子 59

◇今月の二十首詠……コラボレーション 義学登志子 2

磯田ひさ子
真の歌人とは

■作品[A] 椎名恒治・佐久間景他 4 齋藤順子他 28

51

52

坂本佐和子他 60 大倉美與子・奥まさみ他 54

80
A……もとむらしげと・神田鈴子
B……酒井 牧・永田進一

80

A C B A 笹崎愛子他 74 山村睦子他 88

C……光広祥子
オリーブ集…三浦好博

18

滝口智枝子・岩田満喜子 16

18
C……嘉穂子・庄野ひろ子
B……泉 嘉穂子・庄野ひろ子

18

■オリーブ集 大倉美與子・奥まさみ他 54

54

◇今月の二人 久我田鶴子 18

18

■川野知美歌集『ムーンロード』批評 久我田鶴子 18

18

■川野知美歌集『ムーンロード』批評 最近の歌誌より

79

木村文子 20 三井 修

20

■近内静子歌集『山鳩』批評 支社・グループ掲示板（沖縄の会・熊本） 山野幸司 73

73

踏ん張って生きる 「蟬」と「蟬」のことなど（校正室より）

79

土の匂い、山鳩の声 藤田美智子 106

106

香川進の生きものの歌 田土成彦 15

15

（表紙デザイン）Tazuko Kuga

コラボレーション

養学登志子

ぼつりまたぼつりこの世に大切なひとの翳ひく祈りの八月
 まだかすれし音色なれども部屋内の友どちのこと鉢叩のいる
 蝙蝠に空はビロードかもしけぬひと針ずつのビーズ刺繡の
 大きな樹の古りし年輪のみ残りこの街にはもう梟は鳴かぬ
 南西の空に大きな星現れてひときわ音を張るちちらの叢
 数うるに難き蝙蝠スピードもて自在に飛べり激突などせぬ
 急行も特急も過ぎ回送車止むことのなき駅のこおろぎ
 そば通る足音なんぞ感知せずこのひたすらのこおろぎの恋

昭和十年生まれ。
 寝箱グリーブ所蔵。
 歌集に『祈りのかたち』がある。

杖つきて坐るおばさん指図するガレージの屋根修理すおじさん

鴨川の木木のいたみし野分あと人懐こく群れ四十雀柄長

出来たから手渡されたる一冊の文庫の句集『レインボーズエンド』

加減よき電車のゆれに身をまかせ脳をまかせてひたすら文字追う
シャーペンの頭を押して丸印つけむとすれば丸のつらなる

一句」とあれやこれやと言いたくて余白に記せば七七下の句

近頃は車中座席をゆずられる年寄ることのなんとよきこと

七七の下句をつける愉快さに乗車時間の短さよはや

はらはらと一冊を伏せ目をとじるふいに浮かび来邪道という文字

おもしろい言われてそうかも尚引ける貫つていの僕うれしいよ

洒落た表紙は秋の色してかの小紙題名書けって言うではないか

筆ペンのキヤップをとりておもむろに『レインボーズエンド』勝手にコラボ

作品 A

椎名恒治

偶成

・橋

戦後派戦中派の呼称何時の間にか消えて表現世界貧しくなりぬ
明治大正昭和つまりは「戦中」にありてながき戦後にありしならずや
百年に一度はかならず戦争のありて世界は生きてきたりぬ
台風の年々度々襲ひたりしこの国土の山野は危機胎み生く
生かされて生きてわれ九十余年過ぐ交はりし名さへ大方忘る
ふるさとの九十九里浜の海鳴らずや空の風の音
九十九里浜沿ひにして矢指・三川・鶴巻どの村名も今は消えたり

佐久間辰

日乗（一七）

・湾

今日も生きてる。朝の目覚めの心地よささてさて今日はあれを為さんか
生きることに意味などは無し生きることそれが即ち生きる意味かも
鳥の声、虫の声など聞こえなく二階に独り今日も独りで
わが部屋に妻が活けられし秋の花語ることなくわれを見つめる
妻に手を引かれて久しき墓詣り皆んな待ってる思いのままに
ある時はうるさくもありし妻の閑わり今に思えばただ有りがたし
雪しとど積もれば今日も静かにも一日を過ごさん何することなく

坂上直美

秋天瑠璃

・天

秋天瑠璃老いやくことの嬉しさよ刻一刻の呼吸深くする
秋高しタオルもマットも洗い上げ露台いっぱい陽を浴びさせる
しばらくは晴天続くという予報稻架の稻穂も心地よからん
秋天瑠璃今日は着物を着て行かん小菊の模様色はむらさき
同窓会「お綺麗です」の声々に素直に嬉し着物むらさき
卒業し四半世紀が経つというでは私はいくつになつた
明日の日のあるを疑うことなかれ秋夕暮れの紅のいろ

坂出裕子

猛暑

・洛

体温を超ゆる猛暑の夏の果て地震台風こころぼろぼろ
正常な判断無理と思ふまでこころとからだ宙に浮きたつ
とりわけてこころ弱しと思はねど自信うしなひ揺るる不安に
被災せし人を思へる　さなきだにかくも弱れるおのが心に
耐へ難き暑さ続ける夏なりき　生き延びたるか息もたえだえ
いつまでもつづく夏かと思ひしが間に聞こゆる鉢虫のこゑ
何事もなかつたやうに朝より雨が降りをり音もたてずに

佐藤道子 今昔

九十八歳夫の誕生祝にと信州豚のサラリとんかつ
地元で繁盛信州豚のとんかつ屋夏に寄らねば一年悔ゆる
いつまでを共にこの世を旅するや九十八歳夫の祝日
ハルニレテラス目ざす車の列長し裏道さがす常の買ひ物
駐車場広きスーパー常に混む浅間山麓家建て込みぬ
東京の人の買ひ物目を見張る二箇二箇とレジに運べる
観光地となりし夏の軽井沢ひとつ暮しし昔なつかし

鈴木結志

天平の宝物(一)

雄渾の筆致妙なる孔雀経弘法大師を崇め読みゆく
「三十帖策子々細」の行書体綿密にして筆致を極む
空海の書の節度よく伝統の筆致の技をこころに宿す
紀貫之和歌の真筆琴線美筆幸彦にわれをいざなう
薬師経書きの途光格天皇の崩御悲しみ偲び見つむる
千手觀音千の筆持つ思いして聖書家菩薩となりて並びぬ
桃園のみかどの和歌の流れよく筆線さやか歴史を飾る

世木田照比古

ピカドン

・茜

原爆投下の爆音の前の一閃の光を見たり十歳なりき
そのままに「ピカドン」と呼び慣らされき軍は新型爆弾という
むくむくと昇りし雲はきのこ型原子雲と聞きしはその後のこと
弾薬庫がやられたらしと噂せり原子爆弾など誰も識らねば
赤黒く爛れし皮膚に髪はなく被爆の叔母を遠く見ていいき
蓬の葉胡瓜の輪切りを貼りつけぬ被爆火傷になす術もなく
暗き部屋に臥しいる叔母の存在を誰しも口にせず日を送る

閔根榮子 地名

・埼

温暖化のここ迄たり富士山頂に外来植物の根付きしニュース
その草のもとはといえば登山者の衣服や靴に着き来し種子より
地境を昔争いし「二反五畝」今踏切にその名をとどむ
踏切を渡りつつ思うこの辺りひと昔前の荒地のひろがり
大昔の海辺の証と黒浜や江が崎にわが住む沖山しかり
利根川沿い広大な砂丘のありしことレジャーランドになりて久しき
道の辺の紫苑手折りつその高さ揃うと歌いし民子を偲ぶ

閔根和美 秋映

・埼

秋映の名をもつりんごの紅の濃く山国信濃の落日のそら
あの山を越えれば信州これの身は秋のひと日を上州にあり
ふるさとの山よ川よとなつかしみひととき母の手ひきでもとおる
魂の友とし言わん今生のわかれと母はその友を訪う

駅前ゆづづけやきの並木道威風堂々の県庁に至る

上毛の三山のぞみ岱え建つ臨江閣も幽の遺産か
有馬晴信の娘マリアを訪い来しとモレホン神父を刻む「臘橋」

高尾恭子 天翔

・大

白内障の眼ちかづけ墨字「び」か「ひ」か迷いたり音訣録音
京うまれ大阪そだちを侍みつつアクトセント辞典をボロボロにする
わたくしの声をだれかが目と待たん録音室の二時間あまり
白杖の汝に手を添えコスモスのさやぐ風きく古墳のめぐり
天翔る白鳥みずや御陵の杜の緑に風さわぎたり
深手負うヤマトタケルよ父います國のまほろば疎まれてなお
美しい人は見えると全盲の汝の戯れ言ふふふと返す

高津砂千子 千畳閣

・風

竹下妙子 里の霧

・霧

命により恵瓊の建てし大経堂秀吉死にて未完のままに
広きゆえ千畳閣と呼ばれたり秀吉祀る豊國神社
天井も骨もふすまもなきゆえに吹きわたる風ほしいままなる
幼子のベタベタベタと走りゆく広き床の上氣持ちよからん
いにしえの絵画見きわめ難かりき剥がれしるきは戦のときか
境内にどっしりと樹つ大いちよう秋の陽ざしに耀うばかり
波の音ときおり聞こゆる千畳閣秀吉は知らずこの平安を

高橋和代

彼方より

・桃

東京と兵庫の娘そろひ来て家ぬちくまなく清しくなりぬ
朝夕の仏前の香 灯す火を危ぶみ電気と変へて呉れるし
家ぬちでは廊下の壁をたよれとて身の衰へを見破られるつ
「老いては子に従へ」はもつともよ離れ住む身は尚更にして
婿えらびに会社の格を重んじし選択今に認められるる
何事も良き方 良きへと進み来しわが意のみでは成せざりしこと
残し逝く資とも彼方より亡夫のこの身気遣ひ呉るる証しよ

滝田靖子

立冬

・新

茎細き秋桜は風に揺られるて冬近き空を行く雲迅し

かがみこむ姿勢の多き毎日を大の字となりて眠りゆかむか

真夜中をふと目覚めれば部屋うちに月の光の満ちて 泣かむか

寝ては読み読んでは眠り文庫本一冊も終はらぬままに夕方

水を欲るひとりのやうに本を欲る買へば満たされ読まさりしものを

満天星の真赤はうき草の真赤秋は真赤な季節にありき

飛び立てる鳥が散らせるもみぢ葉の根方に積もり立冬となる

小夜ふけて出でたる月の赤ければ秋ぐさの上のしづく冴えたり
夕茜沈める空におぼろなる眉月ありて人思ぼゆる
まゆ形の細き月の出でにけりあはあは昏る山の斜稜に
今朝の霧人をも草木もとさしゆきたまゆら現はる幽けき光
霧の中はや朝光の射し初めて人ゆきゆけば霧も動きぬ
霧しまく泡立草の揺れそばつ 今宵小狐の宴とならむ
川波の十字に寄する見てゐたり何れの流れに吾は依りゆく

田土成彦

シルエット

・宙

銀河鉄道風をともなひいましがたわれのそびらを過ぎたる氣配
アーチ橋にさしかかるとき月光のシルエットとなる氣動車二両
窓開けしときジョバンニも聞きたらむ鈴虫の音のまじる涼風
暮れはやき北国の空発ちゆくと短き汽笛を残す列車は
ゆきゆきて夕日觀音に直に射す夕陽の色を見届けいなむ
羊羹を棒ごとかじる夢に覚め少し胸焼けしてゐる気配
もう一度つかつてからと今すぐとわれと子の持つ意識の落差

田土才恵

秋の歌

・宙

伊勢神宮参拝に新しき朱印帳こころゆたかな一步を行かん

圧巻の巨木の樹齢千三百年伊勢神宮とともにおわせる

外つ國のひとの手を打ち合わす姿のよけれ神殿の前

ボランティアガイドの訛にいくばくかこころほぐして杜を進める

柏手の響き合わせておろがめば外宮の杜に時雨はあるがる

杜の池ばかりと浮かぶ子龜いて声をかくれば寄りくるしばし

内宮の鳥居のまえの赤福にまずは一服伊勢参りして

玉井綾子

鼓動

・羊

中島義雄

霜月

・岡

出してすぐ浮かべる氷の釀す音を声と聞く朝、歌と知る夜
キヤベツの葉一枚づにこだわりて足りない余るはたちの恋も
われのみの動く厨に振り向けば切りしトマトのばかと聞く
糸ぐるまで紡いだような雲の下、鍵忘れし子は呪文唱える
目を伏せて口数少なく帰る子の熱も涙にわが袖湿る
抜かずにはおれぬ刺さりし薔薇の棘抜けば異なる痛みが宿る
乗らぬのはわが意志なれど目の前で閉まる扉に早まる鼓動

虎谷信子

追空会

・伴

民俗を覚めての旅の数かずは、吾の一代の宝なりしか
あこがれの遠野歩みし五十年前。落葉ふかきをふみて曲の家
沖縄の岬に佇てば風わたる、師の歌うたの朗読をきく
小さき船で久高島にわたり来て、御獄の偉き神秘にあひぬ
毎年に正倉院展拝観す。二年会は茶碗の店鹿も入りゆて
もう行けぬ正倉院展メインとぞ。玳瑁螺鈿八角箱

追空会はるか彼方となりゆきぬ。「久志本先生」何故先立ち給ふ

中島央子

休暇村

・森

山を背に古りし宮居のましましぐすみし弁柄梁にのこして
参道の桜落葉をふみゆけり秋の空気をかきませながら
ねんねんの葉をしげらせる蝶のみどり艶めく秋の陽のなか
帰路の足はげまされるる岩の間の二寸がほどの鶴頭の紅
木材を川の流れに運びしと杉山の美し吾野のあたり
いつの世も無事をいのりて村人の渡りしならむ「御禊度の橋」
稻荷社に並ぶ五匹もたち出でて仰ぎるるらむ立待の月

萩葉子

グレープフルーツ

・銀

繰り返す季節と言へどうら淋し今日取り出せる皮手が匂ふ
北風をくぐる下校の少年がもの言ひて優しき喉見せたり
子の呉れし補聴器着けてくぐれば沁々と落葉の音が積もりぬ
部分入歯入れ忘れしを思ひつつ巷を行きぬ斯くて老いたり
酒飲めぬわれを嗤ひし友も亡し酢蛸を食めば連想に頬つ
ネクタイの結びめにつけられし君の眼鏡の奥の淋しさを見る
深爪の指をポケットに潜ませて欠片のごとき夕月仰ぐ

永塚節子

ねこじゅらし

・銀

三月の祝いの席に座す君のおだしき笑顔もはや帰らず
わがとなり壁に寄りつづビール飲む術後なれども気分よろしく
ふるさとの赤城山へと春の彼岸に連れ立ち行きし覚えていますか
ラッセルの先頭引き受け登りしも雪の深さに引き返したり
リクエストに恥じらいつつも宴には野太き声に「妻をめとらば」
いすれまた絆結ばん今少しそちら側にてお待ち下され
秋風に音なくゆるるねこじゅらし君送る日の記憶とならん

中島央子

休暇村

・森

グレープフルーツの皮をむきながら思いうかぶ花の白い花びら
たわわに実りしグレープフルーツ机上に香ったあのひとつから
大小の橙色はグレープフルーツ壜の内外から手をのばすのしみ
一番大きいグレープフルーツ 写真の母と一緒に皮むく
なんにもしてあげてないのにこんなに実ってグレープフルーツ
となりの空き地にアパートが建ち庭の風がまごついている
どんどん畑がなくなつて宅地がならぶ広域避難地域

白子れい 一本のみち

・洛

浜本 芙美 美

はつはるの

・夢

恋う人を征かせ黙々と学び来しわれの青春一本のみち
公立四十年私学十年一すじに勤めきたりし教育のみち
ただ唯に一本のみち勵み来て功労賞彰の通知の届く
万感のおもいの胸にあふれたり表彰受け立つ壇上に
表彰式終えての夜みちにぱっかりとうかぶ満月励ましくる
取り得なきわれに賜いし功労賞かん謝感謝よ世につくさん
表彰を受くるもよろこび共になす家族のなくて灯らぬわが家

ぱぱりょうこ

企て

・鹿

檜垣 美保子

ひかり

・昴

神無月の神の留守居をしめしめとひとつ悪事を企ていたる
曼珠沙華めらめら燃えてあぜ道の一直線をやきつくしたり
滾つ心についてに克ちたり自淨という荒療治をしかと課したるなれば
私の人生上の喜怒哀樂あそび心の介入で處理
いま葬りしあとならんと墓場にて見知らぬ仏を友はおろがむ
性格が違えば斯くは是非もなし片や加害者かたや被害者
手遊びのきつねを障子にかざしおり脈らくもなく幼きしぐさ

浜谷久子

コスモス

・地

福田庸子

四百年の息

・今

コスモスの花束届ける日を過ぎて種づく季の静けさに居る
種落とし秋暮れるまで小さき花つぼみ咲き継ぐコスモス畑
いち輪は消しい風を思はせて食卓まなかコスモスしろいろ
届けたい人思いつづ摘む花を届けぬまことに今年も終わる
とりどりの色の華やぐ束の間の栄華も幸も今とばかりに
行きすりを一、三輪と掛かる声花束にしてコスモスの縁
蕊熟れて落とす金の粉コスモスの咲ききわまれるときの危うさ

はつはるの空を背にして飛ぶ鳥の小さくなるまで目守りていつ
年をとるとはこうのこととかと自らをなだめて仰ぐ中天の雲
われの愚痴きく耳もたぬというようになに風に揺れるパンジーの花
緑化ボスターの子供の原画の発想に今の私はついてゆけない
爬虫類の蛇のいろいろベットとしむ人は「この子ら」と呼ぶ
何時誰と見し彼岸花あかあかと土手の傾りを彩うまばろし
街路の辺すすきひとむらの所まで風の足音ききつつ歩む

藤川和子

十三夜

・眉

船田清子

吉野ケ里

・天

ふり返りみることもなく過ぐる日々秋の草むら実りを隠す

朝露の靴にはじきし草の実の種ぐさわが家を廃屋にする

かそかにもひびくあこのこゑあの大たり冷え込む朝のわれを引き込む

旧暦の名月今宵は十三夜ふふむ盈ち代笑みかくるかに

中天にはや金色の十三夜帰着のツアーは皆黒子なり

十五夜は芋月栗月みのり月生きながらへて祈りにとほし

十五夜のロマンは遙か水星へ帰還かなはぬ隼口惜し

藤田美智子

こんぎつね

・新

赤蜻蛉が出口をさがし行き来する常磐線の夜の車中を

うたれたるごんより撃ちし兵十の悲しみ深し 栗がころがる

前向け前の号令ばかりかかるなり後ろを向けば揺るるコソモス

夫とわれとの記憶異なること多し同じ風景見てゐしものを

それぞれに違ふ煮干しの背の曲がり形はいつの時点に決まる

実りたる稻穂一面に広がりて大地がぐんと盛り上がりたり

夕闇に川面は銀いろ光りつつ空に流れのかたちを示す

藤森巳行

生きる

・銀

許せないいちめや非正規労働を社会の歪みと容認すること

生き辛い世の中だけ生きよう生きることの価値があるから

「命どう宝」「死んで花実が咲くものか」「死ねば死に損」「生きれば生き得」

生きてゐる自分自身が非正規か七十五歳後期高齢者

何のため生きてゐるかと問はれたら我が生き様を歌に詠むため

飼ひ犬のキナ子と孫の英明が私に懐くこれも生きがひ

我が歌を妻は馬鹿にし子は貶すそれでもめげずに生きてゆくなり

大いなる葬棺のみを印象に発掘当初の吉野ケ里あり
葬棺の太き胴内歴代の長の抱へし殻や凝れる
映像の遺蹟公園今風に整備されるる 胸のざらつき

椎の木の林の中なる堅穴住居小さき田圃も広場にあらな
金木犀香り初めしを台風に吹き煽られて茶枯れし落花
木犀の二度咲きもあり今年もと願ふも季は気ままなるま
曼珠沙華ぐうんと伸びて蕾まで空の青きをつんづんつく

牧雄彦

秋踏む

・大

中学校よりトランペットの練習の音聞こえて町は暮れゆく

枯木のやうなおうなが土を掘つてゐる速き思ひ出掘り起こさむとや

らちもなき話を長なが電話する友よわたしの時間を奪ふな

兄も姉も病院に臥す秋となり台風のあと空あをく澄む

病院の庭の片隅日を受けていろはもみちの紅かがやけり

東山やや色づきてしづかなり姉を見舞ひて道に秋踏む

歩みゆく川沿ひのみち秋ふかみ暮れゆく家々いまだ灯さず

松浦禎子

お守り

・羊

いただきしお守りはわれの身に深く今日はお札の参道をゆく

傘寿より過ぎて三年うつし世の香煙に身をゆだねていたり

円仁の再興なりとうこの靈地微笑む人々をそのあかしとし

観光地の恵なす爛漫の浅草寺異邦の家族にわれもまじりて

お千代さんの観音音では昭和なりその歌声もはるかすきゆく

浅草のおかみさんあなたを育てたる地の襲ぬくき観音さまへ

秘仏なる観音像はわが胸にほほえみ湛ういつのいつまで

松 永 智 子 音

・嵐

ましかくなる天井白しましかくなる電灯そしてましかくなる窓方形の八畳の間に方形の窓のあるこの単純に居るたたなはる間に音なくにんげんのこゑきくことの稀なる夜ふけかなしみを交はすことなくみてあればただふかくなる夜のふけの間窓の外にたたなはりくる間の音夜ふけ覚めるてきくことのあり天井も窓枠もドアも白くして夜を通しきくは機器の音らしいにしへの人らつみし間おもふ驕りなるべし灯の中にゐて

三 浦 好 博 反骨の血

・銚

十月になりて元気な蚊のあまた反骨の血は旨くもあるか腰が高いそれ腰落とせ薄水を踏む横綱よ我は疲るる手折り来し泡立草を壺に押し少しく秋の野を広げたり

立冬の汀に來たり波の秀の風に崩れて虹をみちびく

十三夜の月が綺麗と寝る前に声かけをりぬ雨戸織るとき

この頃は輪廻転生有りかとも思へば次は驢馬でもよろし

迷ひといふものもあるらむコスモスの空をのんびり飛ぶ秋津にも

宮 本 靖 彦

竹生島

・凌

山囲む音き湖水の波しづか老い初めての竹生島めざす

胸を擦る階をのぼれば足下に拡がる碧湖老妻もつづく

かはらけを蒼海に投ぐ開運の鳥居も遠く老妻口惜し

多賀大社の反橋のぼる見掛ほど易くは非ず介助板つかむ

図書館に本の薰りをなつかしみ探しと求むる歌の本なし

駅前に娘を送り来し父の車離れたきかゆつくりと発つ突然に灯りの消えてLE灯換ふる術なき己れをいたむ

三 好 聖 三 楠

・伊

玉葱の苗がすくと立ちあがる昨夜霜月の雨ののちにはいまはもう蜜柑は買って食べるも蜜柑農家で量販店で布拉タモリ健気な碍子というせりふ陰の力に思いは及ぶ在ることがすなわち悪であると言う档がかがよう湖のへり弾みつつ縦一列に歩み来る猫の親子へおよぶひかりは来宮で上り電車を待つまにもドクターイエローゆっくり下る呼子さんにいただいたものだと妻が言う鉛筆削りで鉛筆を削ぐ

御 代 田 澄 江 五平餅

・茨

岐阜土産 五平餅焼くもつちりと米飯詰まりしんみり旨し

台風の余波の熱風吹き巻きて凌霄花の葉裏を反す

一度枯れ諦めし鉢のジャスミンに淡きみどりの若葉萌え出づ

枯れ枝を包み込むがに伸び来たるみどり葉柔く命脈保つ

玄関近くに潜みるしけものに遭遇し息子の興奮しばし止まさり

イタチか狸か玄関にぶつかりくしやみして鼻水たらす鼻水跡指す

尻尾太く縞もあり慌てふためき門扉くぐり逃げたと吾も見たかりき

茂 木 熊

小町通り

・埼

悠然と舞ふトンビとは見えながら狩る眼鋭く光らせてゐむ

小町通り人に埋まる上空にとんびは笑ふ「人つてバカね」

人、ひとに小町通りのにぎはひもうるほふ店と集らぬ店と

時のひと尾島さん無私に持つ銘の「かけた情は水に流す」と

なおみさん人に因抜けしスピリット大迫力に全米制す

日光に姿の消えしヘロンさん全満淵は罠となりしや
「いなくわこかんなーまいはつるあ」とは呆けを呼ばないわれのコンジュレ

もとむらしげと

白 秋

・そ

横 田 敏 子

病室の窓

・福

いち早く散りゆく葉あり秋の日の差しこむ数日季節は進む
数多ある菊のつばみに仄赤く色づきしあり今朝の庭にて
母がいて妻がいて二人の子がいたり悲なきやと山鳩が啼く
人間の深み増し来る白秋を過ぎゆかんとして我が稚なさや
かわたれの静けきにいて顧みる苦を負う日々は誰にもあらむ
学び來し日々の尊さ我ひとりの知恵など海に落ちし一滴
読み返す若きにこころ打たれたる本こそ宝我を生かしぬ

八 乙 女 由 朗

折 折

・柴

新米を得てよろこべど米櫃に古米はこの時欠伸するなり
朝ドラに描かれしことき生きたりて猪突猛進ありきかの日は
剥がしたるカレンダーの裏紙にメモる歌気楽なりせば恣意生まれくる
枯れ枝を除きて木本をたすけおり暑氣を越えけり枯るると言うは
刈りあと稻田のがれし煌にて水汲むバケツのあたりに跳ねる
藪を刈る仕事を覗く百舌ありて武蔵の絵よりも現物優し
汽車過ぎしあとのレールに耳當てて聞きしはあれは遠きあの音

山 下 雅 子

新 米

・智

雲厚く降りみ降らずみしと「はけの道」ゆく直哉邸出で
手賀沼のほとりに立つは八年ぶりしのぶ笑顔よ笑い声まで
一羽二羽大鶴向き変え見る見るに群は移動す餌撒く方へ
清子妃の縁の鳥の博物館近々見下ろす瀟洒なすがた
かつて授業の勤労奉仕の害虫とり袋にがさこいなこのみやげ
いなごまろはこへらいたどりも食なりし少女は平均年齢超えぬ
ひと粒に八十八の手間にむる字面の米よ 新米味わう

ベッドより十月の空を眺めおり晴のち曇りくもりのひと日
病窓は一間四方のガラス窓変幻自在の雲流れゆく
病窓の外の手摺に飛び来たる鳩よわたしも翼の欲しき
街灯の一斉に点る夕つ方光る高架橋夜空に架かる
星の見えぬ夜空の下にきらきらと地上彩る数多のひかり
徒然なる日曜の午後の病窓にのつたりと重き雲は動かず
春に来て秋にまた來て馴染みたる横浜の空今日も見上げぬ

吉 内 尚 彦

夏さむし

・浜

意外なり自宅の階段どっかんと倒れてしまう梅雨明けの朝
一枚の戸板にのりて日赤の病院めざすはきっと夢だろう
夏寒しくつ下履いて今日は寝る皆さん暑い暑いと言うに
一台の大型貨物スーパーへたぶん夕べは眠りておらず
同じ向きに生き居る杉に負けるまじ枯れたる杉の一枝搖るる
看護師も夜勤のありてそこのみは一晩中を明かりをともす
我よりもカラス一羽の方が先カラス頑張れ我も頑張る

吉 永 惟 昭

白 夜

・熊

ノモンハン慰靈の旅は仄明かる白夜の興安嶺を越えゆく
五十連客車を牽きし到満州^{オランチ}里竜昇るかの大ループ線
フランシユに頼らず振りし零時前要害なりし鉄嶺の街
ハイラルの駅より望む河南台ここより征きぬ出撃の兵
弧を描く地平線なる草丘に死傷二万と伝う敗戦
ホロンバイル草長けやらす若駒の啞せし息吹の天に連なる
戰場の螢詠みたる友一師偲ぶ縹渺白夜も暮れゆく

朝井恭子　入院

森

市原やよひ　零余子

萬

入院の日に履きて来し黒き靴ヒールの汚れつきしままなり
終日を点滴注射に継ぎて零する音孤独を深む
ほとほと等間隔にしづくする点滴の音夜の耳うつ
消灯となりし病室に本を閉ず　眼れぬ長き夜の始まる
明かり消えもの音絶えし病室に退院の日を思いめぐらす
山茶花のうす紅の花咲き盛り散歩の小犬しきり顔寄す
通院の道に求めし白き菊亡夫に供えて近況語る

磯田ひさ子

雀

森

風のなき昼をけやきの枝騒ぐ雀百羽のかくれるるらし
高きより低きに移る雀らのつきつきとなりの椿にもぐる
民族の移動のごとし陽のある稍にいつしか雀ら群るる
境内に聳ゆる銀杏の黄のなかにあまたの雀ら一羽もゆかず
居ごこちのよき家ならむ雀らはけやき一樹にくるまれてゐる
紙されに太秋柿と太書きにをさなじみの丹精とどく
麻痺の身を受け入れながら柿を摘ぐ友の姿がひと日はなれず

市原志郎

雀

萬

野の花にしかとつかまりしじみ蝶野分の風に揺れ揺れており
真昼間は咲かぬおしい花にして蝶のとまるを嫌うがに揺るる
「五時五分」声出してみる眠られぬ夜の一つの終止符として
わが横を音立てて風が過ぎ行けり「そうだ二百十日だ今日は」
大風に揺れる花にしがみつき食事しておりしじみ蝶一匹
昨日せせり蝶今日しじみ蝶余程みつある花と思えり
築地市場八十三年にて終わるという我と同じ歳とは淋し

文化祭の野菜売場は大根のみ残りて響く売り子の声が

鳥運び来て育ちたる紫式部今朝は小さき実をつけており
庭隅の芋の蔓より零れ落つ零余子に足れり一人のごはん
新しき野菜購つ徒步一分の無人スタンドは秋が溢るる
無人スタンドに秋の入り日差し込みて一瞬柿が光を放つ
葉が早苗田のこと戯ぎいて秋の日を浴ぶいっぱいに浴ぶ
受験生二人抱える嫁みれば若き日の我蘇り来る

大浪美雪　晚夏

森

軒下のくもの巣にやんま揺れており風におくれて大きく揺るる
人去りし晩夏の浜に雨の降るベンキの剥げたる壁を濡らして
庭隅に枝を広ぐる醉芙蓉あまりの暑さに朝よりピンク
四十度越えたる暑さ何やらが燃えてやせぬかと確かめまわる
温度計沸騰せぬかと窓辺より冷房の効く部屋に移しぬ
「躊躇わズクーラー使え」とNHK　そうか電力足りているのだ
種できぬ朝顔かな朝な赤白青と咲きつきおるに

奥田清和

柿右衛門

大

記念日の由布院の湯の桜花今は昔の夜半を夢見る
教科書に習ひし陶工柿右衛門みやげの店に眼をこらし見る
箱書を信じ求めし柿右衛門十四代の小さきい呑み
柿右衛門十四代のぐい呑みの小さきを取れば柿の実の味
柿右衛門十四代の名に惚れて求めしぐい呑み柿の色よろし
求め來し小さきい呑み唇に於て教科書の記事思ひ起こすも
教科書に育ちしわれは陶工の柿の実の色忘れずにある

行えないと行わないの違いなど眠りに入らんしばし楽しむ
のこり火のような暑さの身にしみて傘かたむける彼岸花の路
足許の落蝶に風の吹きくるを樹の根方へと返しきたりぬ
さざ波のひかりがゆけり傾きて実を着けている栴檀の下
背をかがめ小鷺の白を追いてありしジーンズの脚去りてしまえり
まっすぐに伸びる木の道吹かれゆくだれも居らぬ秋の初めは
刈られざる荻の野放図風吹けばかくされし身の泳ぐがにゆく

小野雅子

24号

・羊

台風の運び来れる潮風にはなみづき色も艶も失ふ
赤き実もこうえふの葉も吹き飛ばし塩害といふことばを残す
紅葉のときを迎へて紅葉せぬ塩害に遭へる庭いたましき
去年までの明るき公孫樹くれなるの満天星はただ記憶のなかに
メタセコイア枯れ木のやうに並び立つここに遊べる幼もあらず
恨めしと思ひしまでの暑しさへなつかしみつつ夏服しまふ
小分けして家事を行ふ技おぼえ今日は網戸の一枚拭く

菊岡栄子

施設

・漣

葉月より施設に暮らす身となりて家を離るる思いひとしお
南より朝日の深く入りくれば秋のきざしを覚ゆる目覚め
朝の光窓を通して明るみて新菜出でし夢より覚む
新しき菜の予感する朝はすきんと痛むこれが現実
身を委める介護師によるそれぞれを口には出来ず重く受けとむ
相性の良きも悪しきも介護師さんへ口には出さず從いでいる
一ヶ月振りなる帰宅に伺い猫のマロは手を上げ吾を避けたり

五機六機夏の夜空を渡りゆく星より明るき飛行機の燈
ほればれと浜茄子の実の紅にピントを合わす夕立過ぎて
七十代姉妹三人何れもが亡母の年齢寝込まずに越ゆ
おさまらぬ怒りのように降り来たる咳喘ぐ身をいたわらんとす
(精悍)と叫べばテレビも繰り返す毛並豊かな猫のまなじり
大櫻揺らせど歩行の一時間この界限に雨を降らさず
モーター音震わせながら草刈りの作業をするは七人の使徒

木村文子

地震

・羊

地震のあと黙したままの市街地を食糧抱え歩む母と子
くちびるは水菓子欲する湧きいする真水を欲する言葉ではなく
夜があきてどの店先にも人の列 三日ほどなら買わずに済むが
信号の消えた町なか角ごとで一旦停止 不思議な静けさ
ゆっくりと時は過ぎゆく太陽を確かめながら一日を過ごす
一週間と聞かされ驚く停電は水をも奪うマンション暮らしの
光なき初めての夜かきませた糖の発酵思つて眠る

草刈十郎

無人駅

・世

今年米寿迎ふるわれに炎帝は修行のこととき暑さ与ふる
血の色に咲き燃えあがるカンナなりけふ原爆忌賛の声する
穏やかな川面に想像すらできぬ修羅場のありしをけふ原爆忌
涼しきと思ひし木陰もそれなりの暑さのあるを知りし猛暑日
あれこれの思ひまとめむとかき水溶けても思ひまとまらざりし
乗降客いたく少なき無人駅降り立てば秋草咲きて待つ
どうしても人には語れぬことにして流星に願ふ一事を持てり

國井節子

阿修羅

・春

小西美智子

秋の蝶

・大

秋晴れの空にそびゆる金の鷲尾しづびいま天平の風吹きわたる
藤原の不比等の建てし中金堂七度焼けて八度よみがへる
どこまでが奈良公園でどこまでが興福寺なのか自由に行ける
さんさんと秋陽の下に天平の時代なぞらひ夢の式典
あまたなる人の手になるこの散華ひとひらごとに復興のちから
阿修羅との久方ぶりの対面にうるうるとしてただ立ちつくす
彼岸花咲き盛れるもこの秋は見せたき人のあらぬさみしさ

小泉泰清

タつ日に

・う

煉瓦状の壁にタつ日吸ひ込みて拘置所そびゆマンションに似る
裁判所検察庁に拘置所と司法がそびえわが街平らか
休耕田荒れて久しく芦の生ゆ宵闇しみて葉影の尖る
荒るる但休耕田はタつ日の光を四方に散らしてそよぐ
三日程タベの散歩休みての芒の穂波白く騒立つ
一步づつ緩く歩みてひこばえの夕景搖らす田圃道行く
タつ日の赤き日ざしに憧れの長身足長わが影揺れる

河野繁子

一度咲く

・雁

これでもかと地震災害おそいくる地軸ゆるむや 大山蓮華
雨しとど降る長月に季たがえ蕾ふくらむ四つ五つと
異常気象のもたらす一つに目をみはる薔薇のようなる大山蓮華
花びらの重なり厚く一日目も見守ることく仏のおわす
たましいは野辺に遠らんふわふわと図鑑の花や鳥に逢いつ
紋付の名にふさわしくじょうびたき白くつきりと雄の近づく

ひと恋つることくに今年も渡り来て軒の竿より挨拶をなす

近藤栄昭

東電小屋

・福

刷り上がりし本が届きぬ受領印せかされてゐて狼狽へる吾
鶴色のかバー手づくりの一冊は古びし桑の厨子にも似合ふ
刷り上がりしその一冊を胸元に起きたり寝たり嬉しければ笑ひ
バリアフリーの湯船は成りぬ据ゑられし浴槽台もこれ見よがしに
「安寿」と云ふペルシアンブルーの浴槽台のみ贅沢極まる足浴
やうやくに肩までの湯舟に温もりて至福の午後のミルクコーヒー
昭和十年生まれと知れば懐かしく友への今日の電話の理由

小林能子

ミルクコーヒー

・羊

減らせるか東電アレルギーの減感作一步を踏み出し尾瀬の葉に触る
原発をモミジと池塘にひつじ草東電小屋を選びて歩む
T E P C Oとの刻印の木道たどりゆく環もありたる尾瀬の足元
東電が強制起訴され裁判と所有する山尾瀬ヶ原ゆく

福島を北陸という小屋の人遙かな尾瀬も一部はフクシマ
尾瀬ヶ原北の辺高き燧ヶ岳あれは福島東北の山

夜の更けを霧らへる浜の観覧車無音に色を変へてはなやぐ

めぐりたる赤レンガ倉庫も定かには見定めがたき深まる闇に

暗き海をすべりくるがの船灯り桟橋の辺に確かにこれり

山下公園の赤き靴はく女の子海洋とほく見つめてゐたり

元町の中華街へと曲がりゆきしばし味はふ異国の飲茶

氷川丸の長き歴史によりそへば生き物としも船のいとぼし

あらためてランドマークタワーに見る浜の海波の碧は景色のかなめ

氷川丸の長き歴史によりそへば生き物としも船のいとぼし

あらためてランドマークタワーに見る浜の海波の碧は景色のかなめ

氷川丸の長き歴史によりそへば生き物としも船のいとぼし

島根美智子

■会員消息 ■

第19回小野小町文芸賞の大賞を茨城支社の島根美智子さ

んが受賞されました。表彰式は、平成三十年十二月八日、

ホテルマロウド筑波にて。

銀輪の中学生ら坂降る鶴の群れのひかりをひきて

島根美智子

香川進の生きものの歌 3 田土 成彦

・山こえてみやこを近江にうつしけるいにしへおもへば

雉子鳴きわたる

生駒市菜畠町第十六歌碑

生駒山頂に近い生心科学会前庭からは奈良盆地とその西部か

らなだらかに続く矢田丘陵が一望できる。ここは吹田支社の同

人であつた瀬上とね子氏が夫君と共に起こした全国チエーン店

「セガミ薬局」の一施設として建設されたもので、その眺望の

良い一画にこの香川進歌碑と瀬上とね子さんの「山城と大和を

わかつやまなみのひろがり見れば花霞せり」の歌碑とが生駒石

に刻まれ師弟歌碑として並立している。この敷地内ではつい最

近も瓜坊を伴つた猪にも遭遇したし、雉子の鳴き声にもあった

ことがある。

歌碑の歌は瀬上さんの空間的な広がりをうたつたのに対し、

香川先生は時間的な広がりをそこに合わせていて。雉子は思わ

ぬ身近な処にも現れるし、国鳥として、また諺や民話にもよく

登場する。鳥としては最も時間軸を多量に含んだ存在なのかも

知れない。中大兄皇子が白村江で唐・新羅の連合軍に敗れた後

六六七年に近江への遷都が行われる。これから一三〇〇年後、

香川先生も自ら将として戦いに参画した第二次世界大戦に再び

日本は敗れることとなつた。ある種、中大兄皇子の心境によせ

る想いがあつたのではないか。

瀬上とね子さんは今秋、百二歳で亡くなられた。歌を愛し事業を愛し家族を愛された一代だった。ご冥福をお祈りします。

秋をいただく

滝口智枝子

素直な心で

今月の二人

ひんやりと朝の空気に驚いて見上げた空には雲ひとつなく涼やかな風は吹くのか銀河にもひときわ眩い今日の星空なつかしい人の思い出ふと胸に夕焼けの中のコスモスの道指先にとんぼを止まらせ幼子のほっぺは染まる夕焼け色に軽やかな虫の音色に誘われ庭に降り立つ月明かりの中茶室は野の花楚々とあしらわれ清々しさの中に心を整え新聞の一面にも乗るふる里の大鍋芋煮はギネスの記録に甘党の父に供える栗最中かすかに写真も微笑んでいる「あの赤いあれが火星」と指させば神祕に輝く少年の瞳は夕暮れに帰りの道を急ぎても足を止めるは金木犀の香丁寧に炊きたてごはんをほぐしたら湯気も駆走新米ならなお菊の花愛であとには花びらの秋をいただくお浸しにして赤や黄の落ち葉を踏みしめ歩みては明日へ繋がる夢を温め

私の歌作りは一日の終りに日記を付けるように作っていきます。今日はどんなことがあつただろうか、などとゆっくり考えながら言葉一つ一つ探していきます。うれしかった時には自然に歌も出でてきますけど、毎日そんな訳にはいきません。平凡に過ぎていくことが多いものです。そんな中で今日は夕焼けがきれいだったとか、最近はめっきり赤とんぼの数が減ってきたなあ、などと考えながら歌に表現するようになります。自然の移り変わりもそうですが、自分自身の心の持ち方というものが大きく関わってくると思います。何かがあつて気分が落ち込んだり、夫と意見が合わず相手を責めるような気持ちになつたり、そんな時、佐久間景先生に教えていただいた「美しい心で」ということを思い出し、反省する時であります。短歌そのものはなかなか上手くなりませんが、歌を作るということは、心を作っていくことだと思っております。以前私が作った歌で「私の心中に住む鬼にやさしく諭す私でありたい」これを戒めとして、歌の上達も願いながら、日々過ごしたいと思っております。

ボランティア

岩田満喜子

入会の幸せ

今月の二人

吹田市は福祉に厚く母子会に入りて健診の手伝いをしき
乳児健診の手伝いすれば子が授かると教えくれたる友にしたがう
本当に子が授かりし喜びにボランティアにも心がこもる
還暦を過ぎて老人の世話をする会に入りし日さくら咲き初む
お花見に椅子を持参し還暦の仲間と歌を高らかに歌う
小三の子らに招かれ給食会に土産のボールと折り紙渡す
文化祭折り紙のピエロを合作に来場者らは足止めて見る
元教師の新会長のすすめたる勉強会にみな退屈す
昼下がりは仏像のはなし聴衆の半数近くは居眠りしたり
後半はマジックショーで目を覚ます締めはみんなでなつかしの歌
六十歳代助け合いつつ奉仕する老いとは無縁の日日を楽しむ
若い氣で人のお役に立とうとし夏の暑さに負けて寝込みぬ
これよりは年相応に無理をせず奉仕活動続けゆくべし

私は結婚後、ご近所の方たちのご好意と
助言のおかげで、保健所の三ヶ月乳児健診
のお手伝いのボランティア活動（母子会）
に入れていただき、五年後には待ちに待つ
子供を授かりました。他人様のお役に立つ
ていると言うのではなく、大勢の方たちに
幸せをいたいたと思ってます。その後、
高齢の人たちと一緒に、楽しい時間を過ご
すという、これもボランティア活動に参加
して十年が過ぎました。今もその活動を続
けています。今年七十四歳になり、この夏
の記録的な暑さの中、体操のグループ代表
としてお葬式に出席し、帰宅してから身体
の具合が悪くなりました。やはり年相応に
無理はできないと思っています。短歌の道
には義姉からの誘いがあつて地中海に入会
しました。短歌は美しい情景、叙情を心の
鏡に映し表現されているのが、良いと思
います。私の好きな歌に、佐佐木信綱作「ゆ
く秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひ
らの雲」があります。大阪支社の方たちに、
助けられながら、なんとか続けさせていた
だいております。

◆今月の二人・滝口智枝子作品評◆

湯気もご馳走

滝口さんは、仙台市在住。空を見上げたり、花を眺めたりするのが好きなようだ。

・涼やかな風は吹くのか銀河にもひときわ眩い今日の星空
夏から秋へ、季節の変わり目の星空なのだろうか。空気が澄んでひときわ眩いと感じられるのだろう。そこを更に、銀河にも涼やかな風が吹くのかと捉えたところに滝口さんがいる。

・「あの赤いあれが火星」と指せば神秘に輝く少年の瞳は火星の大接近のあった二〇一八年。作者が懸命に指さす方を向いて、少年は宇宙の神秘に瞳を輝かせたというのだろう。だとすると、四句目「神秘に輝く」では少し言葉が足りない。

・甘党の父に供える栗最中かすかに写真も微笑んでいる食べ物にも季節感がある。ここでは「栗最中」。父に供えて、甘党だった父を喜ばせる。亡き人を偲ぶということは、亡き人がそっと生きている者を温めてくれることのようでもある。

・丁寧に炊きたて「はんをほぐしたら湯気もご馳走新米ならなお炊きたて」はんを丁寧にほぐす、その動作が目に浮かぶようだ。「湯気もご馳走」に、実感がこもる。しかも新米なら尚更のご馳走、と。心の弾みが言葉のリズムにも感じられ、いかにも美味しそうで、ご相伴に与りたくなった。

・菊の花愛でたあとには花びらの秋をいたたくお漫しにしてこれもまた美味しそう。目で見て楽しみ、お漫しにしてまた楽しむことができる。菊の花の素晴らしいところだ。「花びらの秋をいたたく」という表現が光っている。

老いとは無縁

岩田さんは、大阪の吹田市在住。若い頃も、現在も、地域でボランティアをされているようだ。

・乳児健診の手伝いすれば子が授かると教えくれた友にしたがう

これは、若き日のこと。乳児健診の手伝いをして、乳児に接する機会が多いと、自然に子がほしくなり授かりもするという知恵なのだろうか。上の句は8・7・7と、かなりの字余り。それでも、言いたいことをきちんと言うことを選択した。

・本当に子が授かりし喜びにボランティアにも心がこもる友の教えに従って、本当に子を授かったという。こちらの歌は、定型に收まっている。「子が授かる」という教えを受けて、その通りになった、というので「子が授かりし」としたのだろう。

・還暦を過ぎて老人の世話ををする会に入りし日さくら咲き初むこれは、還暦過ぎてから。ボランティアの会に入られたようだ。「さくら咲き初む」とあるので、入会は四月だったのかも

しないが、新しいことを始める意欲が感じられ、明るい。

・六十歳代助け合いつつ奉仕する老いとは無縁の日日を楽しむ還暦を過ぎたと言つても、今は老人とは言わないようだ。もちろん若い頃とは違うが、お互いに助け合いながら何かをして人の役にも立てる。そうした日々を喜びとして、「老いとは無縁の日日を楽しむ」と詠えるのは嬉しいことだ。

・若い氣で人のお役に立とうとし夏の暑さに負けて寝込みぬことは言え、前の歌には、このような落ちがあった。寝込んでしまっては元も子もない。まずは御身大切に!

評者・久我田鶴子

◆今月の二人・岩田満喜子作品評◆

昔まみえ人の温もりにつつまれて—。箕面にお住まいの鈴木太良（近江友七）先生の書齋の書物にあふれる廊下に通されたのは、お下げ髪の頃でした。丁寧なお言葉をかけていただいたことを今も鮮やかに思い出します。「叢隠居」と名付けられた書齋。「はい」と手渡された手作りの歌集八ページに四十二首の短歌、表紙に小さく「みねさんへ」と。これも「叢隠居」とありました。

天王寺中学は、現在の天王寺高等学校。その同窓の先輩への一首、「祐吉と信夫のふたり思ひ見る、國學院に在りて、名を揚ぐ」友七。研究会に参加、学ぶことを止めない人、水木直箭会長のあとを継ぎ、発展させ、心こめて三代目へと引き継ぎされた友七。日の伴グループにて折口全集を輪読、折口信夫研究を口述、道徳観・情素・大阪人としての魅力を誠実に伝えられ、それをグループ長として受け継がれた虎谷信子さんのもと、五七五七の文字を並べて見ていただきました。虎谷さんは快くお応え下さり、お茶にまで誘つて下さり、楽しみ深く学べることを大切に思うもの。そういう会でした。

彦さんも来られ、「鳥船」の歌会に参加され、皆さんから「おばさん」と呼ばれ、先生は「おばはん」と大阪呼びされたようです。折口先生は綽名で呼ばれるので、後から岡野さんは「おっさん」。親しみをもっての呼び名だそうです。「地中海」に名を残されている方々も、大森(むつり)

私と短歌との 出会い

「地中海」への出詠が近づいて言葉選びに困るたび、囁きが聞こえて来るのです。浪速言葉で、ゴーストが救ってくれることなく、聞こえて来れば止めずに居ても良いのかと、言問い合わせ、ゴーストと対話するのです。私の中のゴースト、これが短歌との出会いだったのかと、虎谷様のご指導の良いこと甘え、今も学ばせていただいています。折口全集の輪読もまた続けましょう。

さて、小澤花子歌集『野守』のファンで
あつた塚本邦雄が毎日新聞の「けさひらく
言葉」に紹介した歌が二首あります。その
うちの一曲「まなそこのかけりとなりてか
すかなり越の白山六月の雪」(昭和五十九
年六月十日)。

をすることとなり、矢野さんの噂をすることになりました。「むかしのすさびおみせします」みねさんへと、とびらの文字を賜ったのが羨ましいと。小澤花子（旧姓矢野）雅号柳香。昭和の初め「婦人公論」の短歌欄に遐空と並び載せられていたとのことで、ご本人より押して聞き出したものです。その後、昭和二十一年十一月には、折口先生に請われ大井出石へと、次の年には岡野弘

矢野さんも遐空研究会に参加され、そこでいつも私を「ちょっと」と呼んで下さり、饅頭を半分手渡していただくことがあります。歌人で、遐空賞の候補にあがつた人とは知らずお付き合いいただいた人。晩年、宝塚に移り住まれてからは、松井さんのお家はとたずねて来て下さいました。

※大森さん（大森義憲）・山金さん（山村金三郎）
・塚さん（塚崎進）・友七（近江友七）

広い視野と柔軟な心

三井 修（塔）

歌集の編集の仕方には、編年体（或いは、逆編年体）で編むのと、素材毎に纏めるというやり方がある。これらには一長一短があつてどちらとも言えないだろう。ただ、たまたま最近読んだ黒瀬珂瀬の文章（角川「短歌」二〇一八年十月号）に「家族詠・挽歌・旅行詠と形式的なテーマで章分けするなどはしない方がよい。枠組みを美しく整えれば整えるほど、歌の美は痩せてゆきます。」とあったのが印象に残った。歌集の編み方にはどの歌人もけつこう拘るのだ。

川野知美第一歌集『ムーンロード』は、一応テーマに沿つて編集されているようだ。I章は子供の歌だけで纏めている。読者は一気に子供の成長を辿ることが出来る。ただ、三十年という長い間の作品を収めているため、最初は生まれたばかりの赤子だった子が、息継ぐ間もなく、あつという間に成長してしまつたという印象を受ける。この点は、読者としては何となく慌ただしさが残ってしまう。もしこれが完全な編年体だったら、作者のゆっくりとした人生の流れのあちこちに、少しずつ成長していく子供の姿が垣間見られることになつたかも知れないと思う。

それはそれとして、作品を見ていただきたい。

早く寝ると心の中で叫んでる子の眠る間のわずかな自由 献立と送り迎えの時間のみが我的頭を支配している

太るからと食べ残している母親は子どもに何を遺すのだろう

I章の中ではこのような作品に注目した。子育てに没頭している作者であるのだが、何かの折にふと我に返るような作品である。一首目、「子供が小さい時は子供の為に自分の殆ど全時間を取りってしまう。子供が寝た後だけが自分自身のために使える貴重な時間なのだ。上句は少し荒い印象を受けるが、偽らざる本音なのだろう。多くの母親歌人はそう思っていても、歌わないだけなのかも知れない。二首目、「献立と送り迎えの時間のみ」が自分の頭を支配していることに気づいた作者は、そのことに愕然となる。大切な認識だと思う。三首目の「母親」は自分のことだろうか、それとも他の母親なのだろうか。いずれにせよ、作者は、少なくともどのような環境の中でも決して見失うことのない自我と、この第一歌集という素晴らしい具体的子どもに遺せることに、自信を持っていいであろう。

タクシーのベッドライトが絶え間なくあやとりをする夜の駅前

駅前

荼毒蛾も椿も命をかけている駐輪場の小さな戦争

売店の強力ライトに照らされて破魔矢の純白光り輝く

II章から引いてみた。一首目は私のカルチャー教室で紹介してとても好評だった作品である。「あやとりをする」とは繊細で優しい見方である。「一首目」、「荼毒蛾」、「椿」、「駐輪場」という名詞の具体性が一首を支えている。三首目も、「強力ライト」という文明と、「破魔矢」という信仰の象徴との取り合せに意外性がある。どれも、日常生活のちょっととしたことに眼を向けているのだが、視点が独特で鋭い。

夜の明けぬうち黒髪を結い上げた中学生並ぶメルパルクホール

あと一点あと一墨に届かない残墨選手の背中を見送る

アンカーのあの子は誰よ速すぎる 追いついてゆく先頭走者に

III章はスポーツなどに打ち込む若者の作品で纏められている。

一首目は、上句が母親らしい視点である。男性だとこのようない発想はないであろう。二首目は「残墨選手」の無念さを歌っている。三首目は話し言葉が面白い。誰かと話をしているような文体である。

自分の子共だけではなく、このようないひたむきな若者に寄せる視点は作者の人柄を物語るものだろう。

ベンツにて子供を送る人の人がクリーニング屋のパートタ

イマー

母の胸に抱かれたる子の白き足大きめのソーセージ大の食

べごろ

戦争の被害は容易に語れても開戦の理由を老女は言えず

IV章から引いてみた。一首目、ベンツとパートタイムのアンバランス（本当はアンバランスでもないのかも知れないが、少なくとも作者はそう感じた）を歌っている。ここは連作になつていて、他の作品を見ると「あの人」は作者の知り合いらしい。「あの人」という言い方に少しばかり皮肉が感じられる。二首目、その通りだとは思うが、やはり怖い作品である。幸福と隣り合わせの恐怖を思わせる作品だと思う。三首目はいろいろと考えさせる作品である。我々、戦後生まれの者には、なぜあの戦争を止められなかったのだろうかという素朴な疑問が常につき纏う。当時は、開戦はそういう時代だったとか、止むを得なかつたとか、いろいろの説明があり、そう言わると、黙るよりないのだが、戦後教育を受けてきた我々には済然としない思いがある。この作品の「老女」は、この世代の日本人を代弁しているのだ。被害の悲惨さはその通りだつたろうし、それを語り繼ぐことも大切であろう。しかし、本当に大切なことは、日本がなぜあの無謀な戦争に踏み切ったかという問い合わせであろう。

歌集全体としては、家族愛あり、熱血あり、ユーモアあり、社会批評ありで、幅広い分野をカバーしている。視点も、情熱あり、本音あり、シニカルあり、歴史的視野ありで、様々である。また、表現は、比較的平明であるが、文語口語を交えつつ、感情、素材、場面に応じて巧みに使い分けている。広い視野から柔軟な心で世界を凝視している作者なのだ。いい歌集を読ませていただいたと思う。作者の今後が楽しみである。

層をなす

木村 文子

濃紺の海に銀色の波がさざめく美しい歌集『ムーンロード』。三十年という、たっぷりとした時間の詰まった歌集である。この歌集の特徴は、時間の厚み、喻の豊かさ、そして心地よいスピード感にある。喻の豊かさは、作者の対象の把握の仕方が多面的でかつ深いゆえだろう。また、好奇心と行動力に満ちている作者なので、自ずから歌にスピードが生まれる。

第一章は、子育ての歌から成る。

・小さい歯さやくように生えている笑うと見えるもつと笑つて

ささやくように、の喻が幼子の歯の小ささを際立たせる。笑うと見える小さな歯。もっと見たい、だから笑つて、という素直な呼びかけが、幼子の愛らしさと共に、若い母親の可愛いらしさをも浮かび上がらせる。

・夜の海に映える灯りの一つ二つ数えることもまだできぬ吾子
・泥水の水たまりに立ち足首の深さまでかと子は覗きこむ

・一歳の子どもと共にしゃがんだら行き交う人の足だけの世界
作者には三人のお子さんがいらっしゃる。一首目、灯りを認め、指さしながら母親の方を振り向く子に、ひとつ、ふたつ、

と数えてみせる母親。でもまだ、数えることのできない幼子が愛らしい。二首目では、水溜まりに立って足を見つめる子の思考を想像する。三首目、子と共にしゃがんでみたら、思わぬ光景が広がっていた。子を見つめながら、子の体験を共有することで生まれた歌は、わかりやすい。だが、次のような歌もある。

・君を待つ成長を祈るずっと待つ私は待つという孤独に住む

ここでは、母子関係の本質が詠われる。食べさせ、遊ばせ、どれ程世話をしても、手助けでしかなく、例えひいた風邪は、子が自分で治さねばならない。親は待つしかない。待つことがすべての土台、と作者は知っている。歌集『ムーンロード』は、心を寄せながら待つという孤独に耐えることのできる、自立した姿勢によって貫かれている。作者は観察者であり続ける。だからだろう、自らを詠う時には、次のような歌となる。

・子どもたちが出かけた後の静けさを持て余している掃除もせずに
・暗い星消え入りそうな星たちよ今まで気がつかなくてごめん
視点の自在さが特徴的な、聰明な美しい歌である。

第二章以降では、日常生活を更に深く見つめて詠う。表面を

丁寧になぞることで、その下に潜む層、更に下の層へと、作者は思考を深めていく。もちろん、対象を一心に見つめるがゆえの喩の豊かさに変わりはない。

・タクシーのヘッドライトが絶え間なくあやとりをする夜の駅前

・この海はロシアに続く海なれど真夏を波はとろりと眠る

・夕暮れの礼拝堂の窓のそけば息づいている赤いじゅうたん

・一首目、あやとりをする、の喩が素晴らしい。夜の駅前ロード

・タリーを回る車の動きが、さまざまと浮かぶ。二首目は社会性

を帯びるが、とろりと眠る、という抑えた表現で、北方領土元

島民の哀しみに寄り添う。そして三首目、上の句では作者が好

奇心の趣くままに建物に近寄っていくさまが、窓のそけば、と

いう表現によりスピード感をもって表され、下の句では、息づ

いている、という喩により、礼拝堂という異質な世界の静けさ

と時間の流れの穏やかさを表現することに成功している。

・社会性を帶びた歌も、同様である。

・マスカラに黒く固まるまつ毛ふせ若き母親わが子を見つむ

・着ぐるみのアンパンマンが子に話す「大きくなったね」知人

のように

・泣き疲れ咳きこむ子どもの声を繰り大通りをまた車が過ぎる

一首目、一見、子より自分優先のように見える母親の、親と

してのふるまいに作者は目を留めた。二首目、アンパンマンは

子どもの味方だが、着ぐるみの中のアンパンマンの正体を実は

知らないという不気味さを、知人のように、とスペック言い切

る。三首目は、子どもの泣き声の届かない社会のあり方を問う。

どの歌も、声高に批判するのではなく、喩を使いこなすことで、

見えるものの下にある大きな事柄を、適確に指示示す。

また「休日の雲」のように、ドラマ性のある歌も魅力的だ。

・ぐりぐりと自転車をこぐ登り坂入道雲に近づいていく

・坂道に吹く風はなし自らの呼吸する音風のこと聞く

・坂のうえ入道雲は静まりて遙かかなたの青空に立つ

・作者は、珍しく怒りを抱く。一首目、怒りを昇華させるため

か、自転車で坂に挑む。あるいは、坂を自転車で登らねばならない苦しさが、怒りを呼び覚ましたのかもしれない。作者は、

入道雲をにらみ肩をいからせて自転車を漕ぐ。だが、途中で気がつく。坂道で聞こえるのは、自らの呼吸の音だけ。この二首

目の歌が場面を転換させ、同時に視線を外から内へと向かわせる。三首目、坂を登り切った作者は、何かを理解し許容する。

歌集のタイトルとなっている「ムーンロード」は、希望と喜びに満ちている作品である。

・傾いた日差しを背に受け堤防の上に座りて月の出を待つ

・満月に一日早いかまわぬ恋人いないそれもかまわぬ

・人気なき伊豆北川の海原に浮かびあがりたりザ・ムーンロード

作者は、一人で月の出を待つ。二首目の軽快なリズム、かまわぬ、かまわぬ、という繰り返しの言い切りが、気分の高揚を表す。そしてようやく昇った月を、三首目のゆったりとした

リズムで言祝ぐ。まっすぐに作者に向かって伸びる月光の輝き

を、一途に見続ける姿が思い浮かぶ。「ムーンロード」の濃紺

のカバーを取り去ると白い海が現れるように、作者の見つめる

世界も、層をなしている。今後、何を見つめてどう詠うのか、

その一端に触れさせて貰った者として、楽しみに待ちたい。

踏ん張つて生きる

松浦 稚子

作者は丁度私と同年代を生きてこられ、働きづめの人生をふりかえり、ふと気がつけば八十歳を越えていた。歌集のあとがきによれば早くから働きに出て両親にお金を送りたいという気持から日東紡に就職されたとのこと。しかしこの歌集にはその頃の作品ではなく、結婚の時期より始まる日常詠で何の飾り気もない作者の真実の言葉での作品集である。

地中海の大先輩であった阿久津善治氏をはじめ、前田はるゑさん、小池和子さん達とご縁を結ばれたことはとても好運だったと思う。きびしい生活環境の中で時に欠詠しながらもここまで続けてこられたのは「歌を作るのはだれのためでもない、自分が作るために作るのだ」と励まして下さった阿久津氏の一言が作者の心から離れなかつたことが一因ではなかつたのかと私は想像している。

・しきたりにそむかん心押さえおりここに一生を過すと思えば

・キリストの像を簞笥にしまいおく祈りを忘れ果てしごとくにこの巻頭一首は結婚のとき自分の心にきめた戒めである。この歌集の全体を覆っている一つの雰囲気の原因になつているの

ではないかとも思ったが、意外にもこの宗教に関する作品は見当たらなかつた。

・いらっしゃと吐きたる言葉取り消さんすべなきままに夕映えあかし

・出稼ぎの夫帰りたるその夜に戻る日をはや吾は想いおり

・また来ると背をかがめつつ帰りゆく夫の足音遠ざかりたり

・灰皿にあふるるほどに吸い殻を残して夫は帰りゆきたり

・日中は思い出ださぬ夫なれど子と一人なる夕餉はわびし

・結婚の歌からすぐにあらわれるこれらの作品は家庭の事情と

いうことがあるにしても、作者もまた夫なき家庭を一手に引き受け、お勤めもし、子育てもし、そして田畠の仕事もこなす

という日常が、いかに重々しく人生にのしかかっていたことか。

・骨きしむごとくに疲れて帰る道あかあかと茜の雲流れゆく

この一首がその頃に作者の姿をさまざまと浮かびあがらせて

いる。

・しがみつくわが子をそおとひきはなし朝露踏みて烟の草

この一首がその頃に作者の姿をまざまざと浮かびあがらせて

日常生活の中で夫がそばに居ないということがどんなに心細くなつたよりなく思つたことか。しかし愛の交流相手としてのわが子が両わきにいることの幸せは痛々しくも心なごむ一瞬だ。そしてその家族の中にご主人のご両親や身内の方々の消息を詠んだものが殆んどなかつたということも私の心を打つ。

・じつとしてなどはいられぬごじごしと新しき職場にモップ押しいる

・幾度も昇り降りする階段ヨリフトのような我かと思う

・何氣なく我の吐きたる言葉にカ一日無言で夫は過こせり

・流れ来る汗に口元塩辛し根刈りの人足は男が多し

汗まみれになつての職場詠の中にリフトのような我と自虐的とも取れる表現に注目した。その心のしこりのようなものは次の二首の無言の夫にもつながつているのではないか。根刈りの重労働は男のする仕事で、自分が女ながらにその仕事をせざるをえない立場。作者の心身の疲れがこの抗議のようになつたのではないか。心に迫る作品である。

・生きてあらばかぶりつくならん烟よりもきたてのトマト夫に供える

・足引きし夫の靴音聞こえ来ず窓を打ちつつ吹く北の風

・何に耐え何に優しく生き来しか夫の日記を読みつつ思う

・ばあちゃんのお家はどこと地球儀をぐるぐるまわし幼子は問う

別居生活の歌よりずっと詠まれていなかつたご主人はすでに亡くなつておられた。どこでどのような死をむかえられたのか。それにもご主人は日記を残しておられた。その内容を詠つた一首があつたらと残念に思つた。そしてその間に作者は六人

のお孫さんのおばあちゃんになつていてこんなに平和なあたたかい愛の歌が生まれていた。

・助けてと呼ぶ瞬時もなかりしか野にひろびると鉄路はひかる

・力欲しいま力欲し幼孫の冷たきからだ生かす力欲し

・なぐさめの言葉ことごとく虚しかり列車の過ぐる音聞くたびに

・幼児の死を悲しむや山鳩は芽吹きの山に声くぐもらす身を切るような悲しみの爆発である。突然襲つたお孫さんの事故死のうた。今までの人生の中ひそかに胸の中に留め置いたきた作者の心の底からの叫び。今まで耐えに耐えてきたものは一体何であったのかといふ悶えを感じる。最大の不幸に直面して作者の胸のうちが開かれたと感じたのは酷なことだろうか。

・夕焼けの空と山とを映したる一つの田んぼに宇宙広がる

・やさしさはむしろ寂しくつややかに紫式部の小花咲きたり

・畑土に立てば落ち着く心ならむ昼の三日月ほのぼの白し

・はてしなき世界あること夕焼けの山と山とが遠くに見える

・今年もひとり畑打つことができたりとしみじみと見るわが手わが足

・言い合いをせし日も懐かし亡き夫の長靴履きて雪掃きをする

・働くをよろこびとして打つ畑の足許に黒き土くだけ散る

・誰にでも老いの日は来る朝露に根刈りの鎌をびかびかに研ぐ

・来る年の幸せ願い煤払う古き達磨のほほえみて見ゆ

人生のあれもこれも走馬灯のよう過ぎ去り、ほっこりとした晩年の景色の美しさ。あの重労働の鎌も今は自分の心を磨くようにピカピカに出来る余裕。これからはあなたの思いえがく人生を明るく豊かに歩いてゆかれますように。

土の匂い、山鳩の声

藤田美智子

『山鳩』には、約六十年にわたる近内静子さんの人生がぎっしりと詰まっている。阿武隈山系の中ほどにある滝根町（現田村市）に嫁ぎ、いつかは安らぎの日がくることを願ってひたすら働いてきた人生である。

- ・骨きしむごとくに疲れて帰る道あかあかと茜の雲流れゆく
- ・火を消せば徐々に冷えくる調理室競技のような一日終わる
- 「骨きしむごとくに」に寒感がこもる。「競技のような」という比喩からも労働の厳しさが伝わってくる。しかし、彼女の職場詠・仕事の歌の魅力は、その苦勞を歌うところに留まっていないことだ。歌集からは土や草や風の匂いがしてくる。鳥や蛙の鳴く声が聞こえてくる。さまざまな形の雲やあかね色に染まった空が見えてくる。からだを精一杯動かして生きてきた人の五感が歌を奥行きのあるものにしていくといえる。
- ・調理場に灯りともれば汁の湯気光を持ちて静かに動く
- ・明日のため宴会場をつくり終えぬ並ぶコップに映る夕焼け
- ・お昼寝の時間はしんと静まりて草切の鳴く声の聞こゆる
- ・山に聞く列車の音の遠くして束ねし干し草はや匂いたつ
- ・夕間に追われることく畦草を刈りゆけば一面草いきれ立つ

一、二首目には視覚の確かさがある。灯りがともったことで見える湯気の動き。「光を持ちて」と表現することによって、湯気の動きが読者の目に浮かんでくる。二首目では、宴会場をつくり終えたあととの充足感が「コップに映る夕焼け」をとらえる。歌集からは約三十種類の音や声を数えることができる。なかでも歌集名になつた山鳩など鳥の声が多い。三首目は園児たちのお昼寝によって生まれたほんのひとときの静寂。ほっと一息つきながら鳥の声に耳を傾ける。「葦切」という名詞が生きている。四、五首目は嗅覚のとらえた干し草のにおいや草いきれ。労働の疲れが自然によって癒されるということとは少し違う。厳しい状況をたくましく生き抜く力が五感を磨き、さまざまな事象をとらえているのではないかとさえ思えてくる。これら五感を十分に働かせている歌は日常詠にも多く見られる。

・伐られたる杉の木の香の匂う森見上ぐる冬空広くなりたり

・倒壊の恐れに立入禁止なる教室に水なき金魚鉢見ゆ

一首目は、冷えてきた空気の中で放たれる杉の切り口から漂う匂い。杉の木の伐採によって空が広くなつたという発見。こうした日常生活の中でのさやかな発見を逃さず歌つていると

ころにも作者の個性がある。二首目は東日本大震災後に廃校となつた校舎を詠う。「水なき金魚鉢」を作者の目は捉える。子どもたちの姿のない教室の寂しさと、泳ぐ主のいない金魚鉢。水のない金魚鉢は寂しい校舎の象徴である。

読み進めていくほどに、生活の実感を伴つた飾り気のない表現から近内さんの暮らしの豊かさが見えてくる。五感を精一杯働かせ自然の中で生きている人の、たっぷりとした豊かさと言える。

しかし、そうした近内さんの人生にも癒えることのない悲しみがあった。

- ・燃え広がる火に驚きて隣家のつづじの陰に身を隠しいき

・ふるさとの家を燃やして四十年負い目は常に我にまつわる幼い頃に自分の不注意から火事を出してしまった一連には、当初「罪」という題が付いていた。自分の罪はできれば隠しておきたい。それを歌にすることは「告白」である。このことは、歌集の最初の二首目に「キリストの像を筆筒にしまいおく」とあるように、若き日に出会つた信仰とも関わつてゐるのではないかと思われる。

- ・もう決して危なき處に行かせまじ死出の旅への脚絆をはか

- ・念佛を唱える声の輪に座して閉じる眼裏に幼は遊ぶ

この「ちから欲し」一連は悲痛である。三歳の孫を鉄道事故で亡くしたのだ。この日の午前中、作者は引っ越したばかりの娘家族を訪ねていたという。午後から仕事に戻つたあとの事故だった。越したばかりの新しい土地で危険な場所に気づかなかつた幼い孫。自分が仕事に戻らず付いていてやればという深い悔

いが残る。「もう決して危なき處に行かせまじ」には、悔やんでも悔やみきれない思いが滲む。小さな足に脚絆を履かせながら、その不憫さに作者はどうほど涙したことだろう。瞼を閉じればかわいい盛りだつた孫のしぐさや表情が浮かんでくる。どんなに日が経とうと悲しみが消えることはない。

- ・足引きし夫の靴音聞こえ来ず窓を打ちつつ吹く北の風

- ・ことさらにはみしと思う雪の朝夫の帽子被り雪掃く

歌集の初めのほうにある出稼ぎの夫を歌つた歌もみじみとせまってくるものが多いが、亡くなつたあの歌はおさら心に沁みてくる。「一首目「夫の帽子被り」、三首目「亡き夫の靴また磨きおり」という動作から夫への思いの深さを読み取ることができる。「一首目では聞こえてくるはずのない靴音を聞こう」としている。そこには長く連れ添つた夫への追慕の念を募らせている作者がいる。

- ・どの手かが必ず救うと亡き母の言葉に拌む千手観音

作者は「どの手かが必ず救う」という母の言葉に支えられて、さまざまな人生の試練を乗り越えてきたのではないか。新樹の会の歌会でも、近内さんは自分の来し方を語つてくださるときがある。そのことばの端々からも「どの手かが必ず救う」と信じて生きてきた人生をうかがいしことができる。「よき師との出会いがあり、歌の仲間に支えられたからここまでやつてこられた」と感謝の言葉をいつも口にする近内さん。「教われてきた」という思いがそこにも込められているのだと思う。

八十三歳、まだまだ元気である。近内さんの豊かな歌の世界を永く楽しみたい。